平成23年1月1日発行（毎月1回1日発行）
昭和49年10月15日第三種郵便物認可

明日を創る医療総合誌

CLINIC magazine

2011 JAN 1

No.498

［特集］

在宅医療革命2011

［座談会］

「在宅医療を普及させるには」（東京）

ケーススタディ

池端病院（福井）／新川地域在宅医療療養連携協議会（富山）

［新連載］対談シリーズ

梅村 聡氏 × 長尾和宏氏

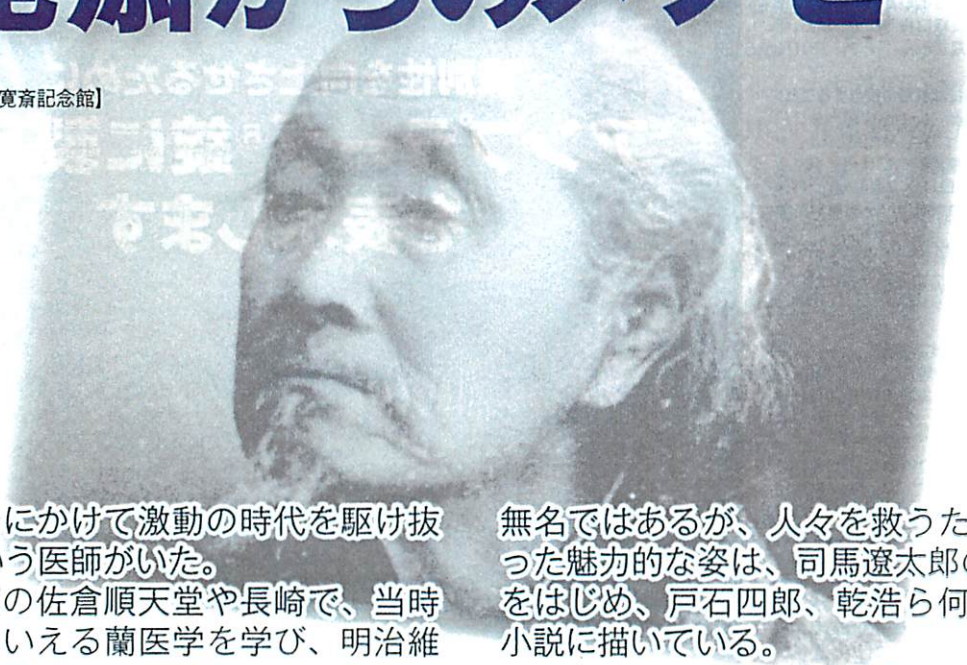
維新の蘭学医 関寛斎からのメッセージ

医界展望2011

嘉山孝正氏／濱田信夫氏／西澤寛俊氏／信友浩一氏／福島雅典氏／邉見公雄氏／堀 正二氏／松澤佑次氏／門田守人氏

対談シリーズ 維新の蘭学医

関寛斎からのメッセージ



【写真提供：北海道陸別町関寛斎記念館】
▶晩年の関寛斎

幕末から明治にかけて激動の時代を駆け抜けた関 寛斎という医師がいた。

寛斎は、千葉の佐倉順天堂や長崎で、当時の最先端医学といえる蘭医学を学び、明治維新の動乱では官軍の野戦病院長となって活躍する。しかし、官途に就く機会をあっさりと捨てて、徳島で一介の町医者として、貧しい人々、病める人々の救済に力を尽くした。また、70歳を超えてから北海道の開拓を志し、現在の陸別町に移住して、発展の基礎を築いた。

時代を動かした維新の英雄たちと比べれば無名ではあるが、人々を救うために懸命に闘った魅力的な姿は、司馬遼太郎の『胡蝶の夢』をはじめ、戸石四郎、乾浩ら何人もの作家が小説に描いている。

本誌では、今月から5回にわたって、医師としての関寛斎にスポットを当てた対談シリーズを掲載する。寛斎の事績を解説いただくのは、末裔に当たる参議院議員・梅村聡氏と現代の町医者の代表、長尾和宏氏。平成の医療人に向けた寛斎のメッセージを読み取っていただければ幸いである。（編集部）

長尾クリニック院長 **長尾和宏氏** vs. 参議院議員・医師 **梅村　聡氏**

第１回（５回連載）

医を志す ～教育パパ・寛斎の失敗～

蘭医学者として活躍した後 72歳で北海道の開拓へ

長尾　梅村先生は、幕末から明治にかけて活躍した蘭学医・関寛斎の子孫なのですね。

梅村　関寛斎の長男・生三が、私の母方の曽々祖父に当たります。寛斎の命日に当たる10月15日、長尾先生と２人で、寛斎が開拓した北海道の陸別町を訪れました。先生はどう感じられましたか。

長尾　町の端から端まで、車で１時間も２時間もかかるような広大な、大陸的なところですね。そして『日本一寒い町』というキャッチフレーズが示すように、とにかく寒い。大変な苦労をして開拓したのだろうなと思います。

梅村　私が2007年の参議院選挙に出たとき、パンフレットには『分け隔てなく人のために ～息づく幕末の蘭医学者・関寛斎の心～』とメインテーマを記載しました。

そこに関寛斎の心を端的に表すエピソードを３つ紹介しました。

寛斎は官軍の野戦病院長として戊辰戦争に参加しますが、敵味方を問わず傷病兵を治療した。これが１つです。

２つ目は、勝利した官軍の野戦病院長でありながら、あっさり地位を投げ打って、士族から平民に戻って徳島で町医者になったことです。貧しい人からは治療費を取らず、裕福な人からは正規料金の何倍も取っています。つまり、彼は医療を経済問題として捉えていたのです。ちなみに無料で治療した人は、有料で治療した人の６倍いたそうです。

３つ目は、「医療だけでは人を救えないのではないか」と考え、理想の村をつくって人を救おうと、72歳で斗満（トマム）原野の開拓に乗り出したことです。私も、まだ寛斎の心がすべて理解できているわけではありませんが、寛斎が発したメッセージを今日の医療人に受け止めてほしいと願っています。

長尾　壮大な人生ですね。私も今回、関寛斎の事績を勉強させていただきましたが、幕末・明治の偉人のなかでも、これほど長きにわたってさまざまな物語を紡いできた人はいません。

医療者としてまず興味をそそられるのは、貧者からお金を取らず、取れる人から取ったことです。今日の健康保険、社会保障の原点ですね。それを自ら胴元になって運営していたというわけですね。

寛斎は、どうして北海道に渡ったのでしょうか。国の施策に協力したい気持ちもあったのでしょう。貧しい人を救うために食糧生産を高めるという考えもあったのでしょう。何か、医療だけではない志があったのでしょうね。

梅村　１つは食糧問題であったと思います。富国強兵策のなかで、新しい土地を開拓していかなければならないと考えたのでしょう。

もう１つは、国防という視点です。当時の日本は、ロシアの南下政策の脅威にさらされていました。屯田兵制度に象徴されるように、北海道で南下を食い止めようとしていましたが、そこに自分も参加しようとしたのだと思います。寛斎は医者なんですが、富国強兵といった当時の国家戦略を強く意識していたといえるでしょう。

それを思うと、現代の医師は国全体の利益という考えが薄いように思います。たとえば、診療報酬のような自分のフィールドのなかの話ばかりに終始しているような気がします。外交的な面も含めて、国益とし

■ 関 寛斎の経歴

西暦	満年齢	
1830	0	上総国山辺郡中村（現在の千葉県東金市）の農家吉井家の長男として生まれる。
1843	13	前之内の関俊輔と正式に養子縁組。
1848	18	佐倉順天堂に入学。佐藤泰然に師事。
1852	22	佐倉順天堂を修了し、前之内で開業。結婚。
1856	26	銚子で開業。
		この頃、コレラ流行し、防疫活動。
1860	30	長崎留学。オランダ人医師ポンペに師事。
1863	33	徳島藩の御典医になり、徳島に移住。
		御典医として活躍。
1868	38	明治維新。戊辰戦争に軍医として従軍。奥羽出張病院頭取。
1869	39	徳島藩医学校一等教授、病院長に就任。
1872	42	山梨病院長。検梅法を発表して実践。
1873	43	徳島へ戻り、関医院開業。
1875	45	徳島新聞に養生心得を発表。
		町医者として徳島で活躍。貧者の無料診療や種痘にも取り組む。
1902	72	北海道の斗満原野（現陸別町）へ移住。
		農地開拓と町医者として住民の診療を行う。
1912	82	子孫から財産相続訴訟を起こされる。
1913	83	服毒自殺。

ての医療というものがあるはずです。

長尾　いまの感覚でいえば、尖閣諸島に診療所を建てたようなものですよ（笑）。

しかも、徳島でとても繁盛している医院経営を止めていくのですから、勇気があるどころの話ではありません。そこに自ら行かねばならないという使命感があったのでしょう。それくらいのスケールの話ですね。

梅村　残念ながら、いまの医療者の多くは、自分の財布からの出入りで物を考えるようになっています。しかし、国が倒れれば医療も吹っ飛んでしまいます。国の財政が破綻してしまっても、やはり医療は壊滅的な影響を受けます。そういう意味でいえば、医師会活動にすら参加しない医師が多い状況は話になりません。医師会も自分たちが国益にどう寄与していくかという視点で話をしていくべきだと思うのです。

長尾　まさにその通りです。いまは国民にそこを見透かされてしまっているから、医師が何かを言っても信用してもらえないのではないでしょうか。関寛斎は行く先々で、住民に心の底から尊敬されていました。そういう志が持てるのか問われているように思います。

18歳で立志した寛斎と英才教育を受けた長男

梅村　その「志」なんですが、いまの医学生は本当に持っているのでしょうか。先日、大学の先生と話をしていたら、「医学生の質が落ちている」というのですね。

地方の大学では、学力試験の結果よりも、高校の担任に「その生徒は公のために働くような人間なのか」と聞き取りしてから入学させるほうがよい、という意見まで出ていました。

長尾　正論です。人のために尽くしたいという気持ちが医師の原点ですから。そんな気持ちがある若者なら、ある程度の学力さえあれば、どんどん医師になって活躍してほしいと痛切に思います。

梅村　正直言って、医師になってしまえば、微分積分も方程式もほとんど要りません。四則演算さえできれば、大抵の計算はできます。

長尾　私は私立大学を卒業し、国立大学の医局も経験しました。私立大学出身者には、地域で活躍し、尊敬を集めている医師が大勢います。

たとえば、在宅医療の世界では「長崎方式」、「尾道方式」と呼ばれる2つの先進的モデル地域があります。それぞれのリーダーである白髭豊先生、片山壽先生は、奇しくも同じ東京医科大学の出身です。

すべては志であって、学力ではないと思います。患者さんに尽くしたいと思っている若者をスカウトして、医師として養成するという考え方が必要です。国立大学でも、そうした枠を設ける手はあるでしょう。

梅村　関寛斎は、18歳で佐倉順天堂（順天堂大学の前身）の佐藤泰然に弟子入りします（参考・**写真1、2**）。ちょうどいまの医学部新入学生と同じ歳ごろです。

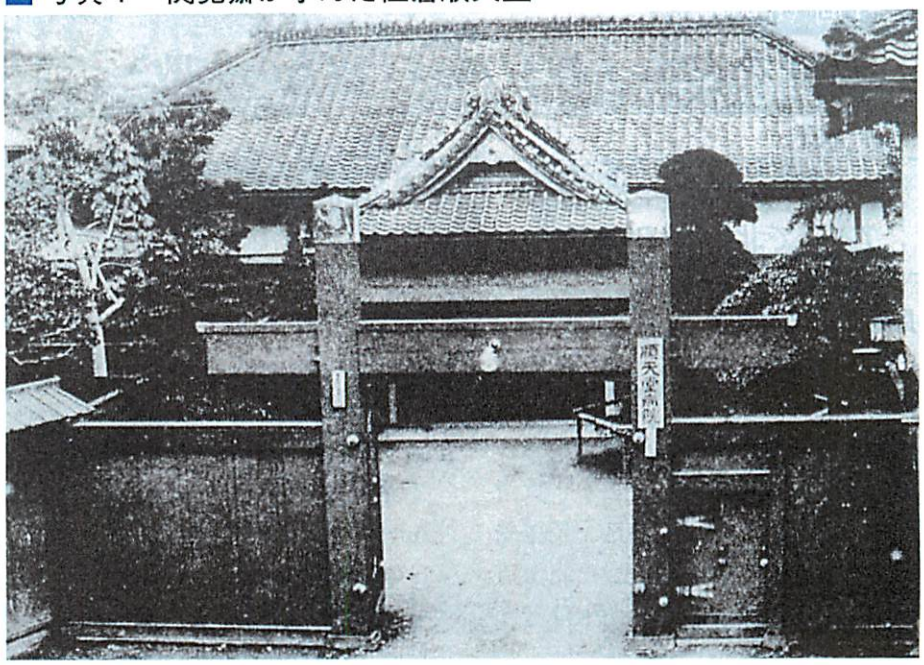
寛斎（幼名・豊太郎）は、千葉の農家の吉井家に生まれますが（**経歴年表**参照）、3歳で母を亡くし、親戚の儒学者であった関家に養われます。そこで人のために働きたいと志し、当時は士農工商の身分制度がある時代ですが、自分から敢然と医師の世界に飛び込んでいったわけです。

関家は私塾を開いていましたから、そこを継ぐ道もあったと思いますが、自分の意思で飛び出して医学の道に進みました。

長尾　なるほど。自ら志を立てたわけですね。

梅村　ここからはあまり知られてい

■ 写真1　関寛斎が学んだ佐倉順天堂



■ 写真２　関寛斎の著作『順天堂経験』

ない一面ですが、関寛斎は実はものすごい教育パパで、長男の生三を12歳前後で佐倉順天堂に入れます。長男を「明治天皇の侍医にしたい」と言っていたそうです。

長尾　英才教育ですね。

梅村　ところが、無理強いがたたって生三はノイローゼになってしまいます。生三は天皇陛下の侍医ではなく、“医療救民運動”という社会の底辺にいる人々を救うような活動にあこがれて、寛斎と対立して廃嫡されてしまいます。

さらに、寛斎の強い希望で、大学東校（現東京大学医学部）に入りますが、生活は荒れ果ててしまったようです。

生三は、後に徳島で同和運動にも関心を持ち、参加して活躍します。寛斎と生三は、実はよく似た親子なんです。

その違いは、自分の意思で医者になった寛斎と、親に無理強いされて医者になった生三の差です。大事なことは、志を持たずにお仕着せでなった医師はやっぱりダメだということです。私の先祖がまさにそうだったのです。

二世、三世の医師が悪いとは言いませんが、裸一貫で飛び込んだ初代にはかないません。

裸一貫から身を起こした寛斎は生きる力のエリート

長尾　政治の世界も、もしかしたら一緒ではないかと（笑）。

医師の世界の話に戻しますが、二世、三世でも志のある医師はいます。ただ、私の知る限りでは「親が医者だから」、「成績がよくて先生が行けと言ったから」といった理由だけで医師になった人は、行き詰まっているような人が多い気がします。40歳代、50歳代になっても、「どういう医療をしていけばいいのかわからない」という医師も現実にいます。

梅村　寛斎の時代は、身分社会がちょうど壊れようとしている時代でした。裸一貫から身を起こしたパワーが、単なる町医者ではなく、貧民救済を行ったり、北海道を開拓したりという道を進ませたのだと思います。

言い換えれば、彼は「生きる力」のエリートなのです。現代日本の医学部には、親が裕福な資産家で、学校の成績がよくて、という恵まれた環境の下、一本道で進んできた学生が多く、生きる力が感じられません。

そういう意味では、格差社会が日本の活力を奪っていると思います。いま、1人親で経済力のない家庭の子が医学部に進むのは至難の業です。

長尾　私は母子家庭で育ち、医学部に入りました。非常に珍しい例だと思います。たまたま当時の東京医大に入学金免除制度があり、いまの自分があるわけで、ありがたく思います。そういう意味でも、これからの医学部入試のあり方を見直していただきたいと思います。

それにしても、関寛斎が教育パパだったとは、ちょっと驚きましたね（笑）。

◉ 次号は、第２回「蘭学と漢方 ～長崎で蘭学修行し漢方にも傾注～」をお届けします。

長尾和宏（ながお・かずひろ）
1984年東京医科大学卒業後、大阪大学医学部附属病院第二内科入局。病院勤務の後、1995年兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。現在、医療法人社団裕和会理事長、長尾クリニック院長として外来診療と在宅医療に従事。『町医者力』など著書多数。
尼崎市医師会地域医療連携・勤務医委員会委員長。

梅村　聡（うめむら・さとし）
2001年大阪大学医学部卒業後、同附属病院第二内科入局。箕面市立病院、阪大病院で勤務した後、2007年参議院選挙に大阪選挙区から立候補し、128万票で当選。
民主党参議院政策審議会副会長、同「適切な医療費を考える議員連盟」事務局長。日本内科学会認定医。